

—巻頭エッセイ—

地質調査所の国際化を考える

加藤 碩 一¹⁾

はじめから私事で恐縮ですが、6月から国際担当の首席研究官に衣替えをいたしました。これを機会に時代のキーワードである国際化、とくに地質調査所の国際化について考えてみたいと思います。

地質調査所の国際化をひとことでいえば「地球科学諸分野における地質調査所の国際研究戦略を確立し、それに基づく国際研究交流の実践を通して地球科学の進展に寄与する」ことではないでしょうか。

1) 国際研究戦略(グランドデザイン)の確立

研究が単に効率のみを追求すればいいというものではないのは当然ではありますが、人的・物的資源に限りがある以上、研究組織として、そのより一層の有効利用を図るのもまた当然であります。このことは具体的にはプロジェクトに優先順位をつけざるを得ないことを意味します。その際の基本方針が大いに議論され今後速やかに確立されるべきですが以下に考慮すべき点を挙げてみます。

・国立研究所の役割…私達地質調査所の職員は研究職の国家公務員ですから、その研究成果はもとより国民社会に還元され、日本のために役立てられることが要されます。もちろん狭い意味の一国繁栄を図ればよいというものではないことは当然です。しかし、半面国際化ということは相手があつてのことであり、またお金のからむことでもあるのできれいごとだけではすまない面も多々あります。一歩ひけば二歩つければ三歩つけれられるようなこともあり得るのです。その意味で最後によって立つ基盤は地質調査所の広義の利益、ひいては国益に沿うか否かという判断であるといえるのではないのでしょうか。ここではまた地質調査所の置かれた立場からの組織的対応も考慮されなければなりません。

・研究のシーズ…上記のことと矛盾する言い方ですが、地質調査所にとっていくら必要なプロジェクトでも研究者にとって興味や関心のないテーマを押しつけられても良い結果がでてくるはずもありません。

ん。ニーズとシーズをどのようにバランスさせるかが問題です。各テーマの有機的連関を図り研究者のライフサイクル等も考慮して中期的計画の策定をはかるのも一法ではないでしょうか。

・アジアへの回帰…社会経済文化面などの一般的な国際交流においてもアジア地域内での交流の顕在化が指摘されています。地質調査所の過去の ITIT 特別研究や集団研修などの対象国をみてもアジア地域が圧倒的に多いようです。こうした過去に蓄積された研究実績や人的関係を生かし、また日本の置かれた地政学的立場を考えればアジアさらに環太平洋地域重視の方向は今後の大きな流れになります。

2) 国際研究交流の実践

・国際機関等との連携…現実に国際プロジェクトを進捗させていく場合とくに多国間国際研究協力にあたっては関連国際機関と協調していくことが望ましいわけですから(例として本号特集参照)。

・ネットワーク作り…情報や人の交流を組織的に進めるために地質調査所がイニシアチブをとったネットワーク作りが望まれます。この意味で地質調査所会議等の積極的な活用が図られるべきです。

・情報基盤の整備…とくにアジア地域での地圏情報の流通は良くありません。そうした基礎情報基盤整備を継続的に実施すべき主体としては地質調査所が適任であろうと思います。さらにグローバルな情報化にどう対応するのか考えねばなりません。

・研修事業の強化…途上国のニーズに応じた地球科学関連の技術研修コースの拡充を図るべきでしょう。これは先進国の責務でもあり、また国際交流はキブアンドテイクが基本でもあるからです。このとき特定の個々の研究者に負担がかかるのは好ましくなく、ここでも組織的対応が要されるわけですから。

KATO Hirokazu (1995): What is the internationalization in the GSJ?

キーワード：国際化

1) 地質調査所 首席研究官